無自性性論証を行う際のバーヴィヴェーカとカマラシーラの立場について
――無原因から生起しないことの論証を中心に――

林　　玄　海

はじめに

中観派（Mādhyamika）は，一切法が無自性であることを様々な方法で論証する際に推論式を積極的に導入するかを巡り立場が分かれ，積極的に導入する人物としてバーヴィヴェーカ（Bhāviveka, ca. 500–570）が，それに対抗する人物としてチャンドラキールティ（Candrakīrti, ca. 600–660）が挙げられる．後期中観派のカマラシーラ（Kamalaśīla, ca. 740–795）は前者に位置付けられ，バーヴィヴェーカが示した推論式に対する批判を『中観光明論』（*Madhyamakāloka*）で取り上げ，バーヴィヴェーカを擁護することが先行研究で指摘される．以上より，無自性性を論証する際のカマラシーラの立場は基本的にバーヴィヴェーカと同じだと考えられるが，それは常に言えることなのだろうか．その点について，自身と他者と自他の両者と無原因から生起しないことを証因とする論証（以下「金剛片」）の無原因から生起しないことの論証（以下「無原因」）を通して検討する．

1.　先行研究の指摘

カマラシーラがバーヴィヴェーカを擁護する箇所を扱う先行研究は江島 1980, 森山 1995, 1997 である．江島 1980 は，『中観光明論』に見られる 5 つの無自性性論証を中心に扱い，その際にバーヴィヴェーカとカマラシーラの論証の関係について検討する．そこでは，バーヴィヴェーカの『般若灯論』（*Prajñāpradīpa*）で自身から生起しないことの論証（以下「自不生」）と他者から生起しないことの論証（以下「他不生」）を説明する際に見られる推論式をカマラシーラが取り上げ，その正当性を主張することが指摘される．そして，推論式を扱う上でのバーヴィヴェーカとカマラシーラの立場の違いが見られることを指摘しつつ，カマラシーラの立場を「Bhāvaviveka に端を発する推論式による無自性性の論証を継承し，先学たる Jñānagarbha, Śāntarakṣita によって確立された所謂る中観瑜伽の立場に

立っている」とする．また，森山1995, 1997はそれぞれ『中観光明論』の「他不生」と「自不生」においてバーヴィヴェーカが示す推論式に対するチャンドラキールティ批判にカマラシーラが反論する箇所を具体的に取り上げる[1)]．以上より，バーヴィヴェーカと同様にカマラシーラも無自性性を論証する際に推論式を導入し，さらにバーヴィヴェーカの示した推論式に対する批判に返答する点で，基本的にカマラシーラはバーヴィヴェーカと同じ立場に立つと考えられる．

2. バーヴィヴェーカの「無原因」とそれに対するチャンドラキールティの批判

それでは，バーヴィヴェーカの「無原因」とそれに対するチャンドラキールティの批判を見てみよう．バーヴィヴェーカは『般若灯論』で無原因（ahetu）についての基本的な解釈をしたうえで，それとは別の理解を示す[2)]．

> また，「無原因」(ahetu）とは「悪因」(*kuhetu）で〔も〕ある．〔それは，悪い妻に対する〕「妻ではない」など〔の表現〕のようにである．悪因とは何か．自性や主宰神やプルシャや根本原質や時間やナーラーヤナなどである．なぜなら，〔それらは〕正しい〔原因〕ではないからである．諸存在はその無原因〔，すなわち悪因〕から生起しない．なぜなら，それから生起すると示す推理は存在しないから，そして推理の拒斥〔があること〕になるからでもあるということを意図している．

バーヴィヴェーカは無原因を悪因と解釈し，それについて検討する．そして，「無原因」の最後に，ブッダパーリタ（Buddhapālita, ca. 470–540）の「無原因」を批判する．それを受けて，チャンドラキールティは，『明句論』（*Prasannapadā*）において次のようにバーヴィヴェーカを批判する[3)]．

> その時に，これ（バーヴィヴェーカの主張）は妥当ではない．なぜなら，前に語った過失があるからと他の者たち〔，すなわちチャンドラキールティ〕は言う．また，主宰神などを包摂するためであるというそのことも妥当ではない．なぜなら，主宰神などが自身，他者，〔自身と他者との〕両者の主張に認められている通りに含まれているからである．

チャンドラキールティはブッダパーリタ批判と無原因を悪因とする解釈の2点についてバーヴィヴェーカを批判する．特に，後者について，悪因に対する検討は「自不生」などに見られ，再び行う必要はないとする．

3. 「無原因」におけるカマラシーラの態度

以上2点の中で，本論文では，悪因についてカマラシーラがどのような態度を

とるのかについて検討する．カマラシーラの中観論書において「金剛片」が見られるのは，『中観光明論』，『一切法無自性成就』（*Sarvadharmaniḥsvabhāvasiddhi*），『真実光明論』（*Tattvāloka*），『修習次第』（*Bhāvanākrama*）初篇の4著作である．各著作におけるカマラシーラの「無原因」は，以下の5点にまとめられる．

（a）無原因であることを論証する際には，勝義と世俗どちらであっても喩例が成立しない
（b）存在はある時のものであり，それが依拠し，それに利益をなすものである原因を持つ
（c）無原因であればそれぞれのものに区別がなくなり，（c_1）一切のものが一切のものを自体とし，（c_2）存在の前後の状態に区別がなくなり，存在は常に存在し，非存在は常に非存在になってしまう
（d）無原因であれば，直接知覚との矛盾が見られるなど，主張命題の過失が見られる

その中で，『中観光明論』では（a）（b）（c_1）（d）が，『一切法無自性成就』では（a）から（d）のすべてが，『真実光明論』では（a）（b）（c_1）と不完全ではあるが（d）が，『修習次第』初篇では（b）（c_2）が見られる[4)]．カマラシーラは「自不生」などではバーヴィヴェーカを擁護するが，「無原因」では悪因に対する批判に回答する箇所は見られず，自身で無原因を悪因と解釈する箇所も確認できない．したがって，無原因を悪因と理解するか否かという点で，カマラシーラはバーヴィヴェーカとは異なると考えられる．

カマラシーラが「無原因」においてバーヴィヴェーカと同じ立場を取らない点について，現段階ではその理由を明確に示すことはできないが，次のように想定することは可能であろう．すなわち，カマラシーラは推論式を使用する際の立場が異なるにもかかわらず，バーヴィヴェーカが「自不生」などで示した推論式を擁護する．以上より，カマラシーラの立場はバーヴィヴェーカの見解に自身の解釈を施しつつ継承するものと想定できる．しかしながら，バーヴィヴェーカが悪因とするものの一部の批判が，カマラシーラの著作では「自不生」などに見られるため，「無原因」で改めて論証する必要はないと判断したと想定しうる．

おわりに

以上で，カマラシーラの無自性性論証における立場について，「無原因」を取り上げ考察した．バーヴィヴェーカに対するチャンドラキールティの批判の中で無原因を悪因と解釈する点について，カマラシーラはバーヴィヴェーカを擁護せず，自ら悪因と解釈する箇所も見られない．したがって，カマラシーラはバーヴィヴェーカのように無原因を悪因と解釈せず，その点で両者は必ずしも同じ立

場をとるわけではないことを指摘した．

〈注〉
1）以上2点について，森山1995，1997はチャンドラキールティの批判として取り上げる．しかしながら，『中観光明論』ではチャンドラキールティの批判に返答していると理解できる明確な根拠がない点に注意しておきたい．　2）PP，D50b7–51a1，P61a4–6.　3）PrasP, 197.1–198.1.　4）「無原因」の内容と各著作の対応は以下の通りである．なお，MA と TA はデルゲ版の，そして SDNS と BhK I は各エディションのロケーションを挙げる．（a）MA, D199a4–5; SDNS, 156.10–19; TA, D267a3–4:（b）MA, 199a5–7; SDNS, 156.5–8; TA, 267a4–5; BhK I, 200.15:（c_1）MA, 199a7; SDNS, 156.19–21; TA, 267a5–6:（c_2）SDNS, 156.8–10; BhK I, 200.16–18:（d）MA, 199a7–b2; SDNS, 156.22–157.5; TA, 267a6.

〈略号表〉
BhK I　*Bhāvanākrama* I of Kamalaśīla. *Minor Buddhist Texts*, *part II*. Ed. Tucci Giuseppe. Serie Orientale Roma vol. IX. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1959.
MA　*Madhyamakāloka* of Kamalaśīla. D（3887）sa 133b4–244a7, P［101］（5287）sa 143b2–275a4.
PP　*Prajñāpradīpa* of Bhāviveka. D（3853）tsha 45b4–259b3, P［95］（5253）tsha 53b3–325b6.
PrasP　*Prasannapadā* of Candrakīrti. *In Clear Words*: *The Prasannapadā*, *Chapter One*. Vol. I, Introduction, Manuscript Description, Sanskrit Texts. Ed. Macdonald Anne. Vienna: Austrian Academy of Sciences, 2015.
SDNS　*Sarvadharmaniḥsvabhāvasiddhi* of Kamalaśīla. See 森山1982.
TA　*Tattvāloka* of Kamalaśīla, D（3888）sa 244b1–273a4, P［101］（5288）sa 275a4–312a5.

〈参考文献〉
江島恵教　1980『中観思想の展開――Bhāvaviveka 研究――』春秋社.
森山清徹　1982「カマラシーラの *Sarvadharmaniḥsvabhāvasidhi* の和訳研究（2）」『佛教大学大学院紀要』10: 109–158.
――― 1995「Kamalaśīla による〈他不生〉の論証方法と経量部の因果論――因果同時，異時説の論破――」『仏教大学文学部論集』79: 1–19.
――― 1997「後期中観派のサーンキヤ学説批判とダルマキールティ――自不生の論証，因中有果論，顕現説批判――」『仏教大学文学部論集』81: 17–36.
――― 1998「カマラシーラの四不生の論証とダルマキールティの刹那滅論――自他の二，無因からの不生起説――」水谷幸正先生古稀記念会編『佛教福祉研究』375–387.

〈キーワード〉　カマラシーラ，バーヴィヴェーカ，無原因

（京都大学非常勤講師）